

いわら、 沖縄美ら海水族館動物健康管理室。

This is Okinawa Churaumi
Aquarium Animal Health Management Section



世界一の治療をチームで目指す



第
だい
4
章
しよう

けがをした魚を
熱帶魚の海
にもどすまで

ヒブダイ



第
だい
3
章
しよう

サミの人工尾びれプロジェクト
もういちど仲間と泳ぐために



第
だい
2
章
しよう

世界一の治療を目指して



第
だい
1
章
しよう

沖縄美ら海水族館
飼育員とのチーム医療で命を守る



第
8
章

第
7
章

第
6
章

第
5
章

ウミガメ

保護したウミガメを海にかえす

ジンベエザメ

海の生き物はなぞだらけ

ホホジロザメ

サメ研究っておもしろい

マナティー

赤ちゃん誕生

エピローグ

あとがき

218

215

173

153

123

99



沖縄美ら海水族館

し いく いん
飼育員とのチーム医療で命を守る



美ら海水族館の目の前に、美しい沖縄の海がひろがっている。

サンゴ礁では、色とりどりの魚たちが泳ぐ。遠くの海を、マグロなどの大きな魚やクジラたちが泳いでいく。

太陽の光がとどかないような深く暗い海の底にも、さまざまな魚たちがすんでいる。

美ら海水族館は、こうした沖縄のゆたかな海をそのまま再現している。水族館には、魚たちにあわせたいくつもの水そうがあるのだ。

いちばんの人気は、沖縄本島の北がわを本州のほうへむかう海流、「黒潮」の名前



沖縄美ら海水族館の入り口では、ジンベエザメのモニュメントが出むかえてくれる。

を、そのままつけた大水そう、黒潮の海。

正面にある高さ八・二メートル、横幅二十二・五メートルという大きなアクリルガラスは、二〇〇二年の開館のときに世界一の大きさとして作られた。

見上げるほど大きなアクリルガラスの前に立つと、まるで自分が海のなかにいるかのような気分になる。全長が八メートルをこえるジンベエザメや、マンタなどの大きな魚たちが、目の前をゆつたりと泳いでいく。

水そうのある建物を出て、海のそばまで歩いていくと、イルカ、ウミガメ、マナティーに会える。

美ら海水族館では毎年、新しい命が次々と生まれている。本物の海とおなじように、安心して気もちよくすごせるからだ。

餌をやり、水そうやプールのなかをきれいにして、生き物たちを見守っているのは飼育員たち。魚を担当するのは、魚類課。イルカ、ウミガメ、マナティーを担当するのは、海上獣課。

そして、水族館にいるすべての生き物の健康を管理し、具合が悪くなつたり、けがをし

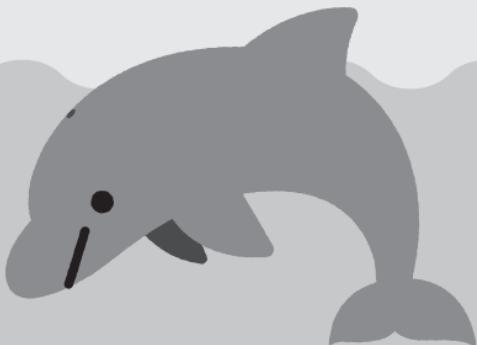
たりしたときのためにあるのが、病院のような動物健康管理室だ。
人間の病院に、医師、看護師、検査技師がいるように、獣医師、動物看護師、検査をおこなう検査担当者が、飼育員といつしょに、一つのチームとなつて命を守つている。

だい 第 2 章 しょう



イルカ

せ かい いち ち りょう め ざ
世界一の治療を目指して



海のそばから、歓声があがる。

イルカショーがおこなわれるオキちゃん劇場では、イルカが高くとびあがり豪快なジャンプをきめている。

飼育員のサインにあわせ、尾びれを水面から出してぱたぱたとふつたり、プールサイドに上がつたりと高い能力を見せる。イルカは水族館の人気者だ。

オキちゃん劇場のうしろには、三つのプールがあり、それぞれのプールにあるとびらをあけると、イルカたちはオキちゃん劇場と自由に行き来できるようになつていて。

このプールにかこまれるようにあるのが、動物健康管理室の検査室だ。海獣課で飼育しているイルカ、ウミガメ、マナティーの健康を管理するための検査室だ。

検査室には、大きな丸窓が三つあるけれど外の景色は見えない。見えるのは、オキちゃん劇場と、うしろにあるうちの二つのプールのなかのようだ。

朝、動物看護師の中谷里美がやつてきた。うすぐらい検査室の電気をつけると、すぐに一頭のイルカが丸窓に近づいてくる。一昨年、オキゴンドウのももが産んだ、オスのライ



オキちゃん劇場のイルカショー。
青い海をバックに、イルカがジャンプする。

ズだ。ライズは毎朝、検査室に電気がつくと、口先を窓におしつけるようにしてのぞきこんでくる。

朝のあいさつなのか、早く餌がほしいのか。ライズは、好奇心いっぱいで、見るものすべてに興味しんしんなのだ。

教室の三分の一くらいのひろさの検査室には、動物のための薬や治療するための道具、血液をしらべるための機械や顕微鏡などが、ところせましとおかれている。

中谷は、朝いちばんでおこなうイルカの検査セットがはいつた箱の中身をたしかめると、プールサイドへむかう。



イルカプールのそばにある、海獣のための動物健康管理室の検査室。
ときどきイルカが、窓からなかをのぞきこんでくる。

飼育員の朝は、餌の準備からはじまる。

海獣課の事務所のわきにある餌を準備する場所では、飼育員たちが包丁をにぎり、とんとんとリズミカルな音をさせながら、イカ、サバ、トビウオなどの魚を食べやすい大きさに切つていく。

美ら海水族館には、バンドウイルカ、ミナミバンドウイルカ、シワハイルカ、オキゴンドウなど、種類のちがうイルカたちがいる。

からだの大きさがちがうので、食べる量もちがう。

さらに、このイルカはちょっと太り気味なので、カロリーのあるサバはひかえめに。こちらのイルカは食欲がないので、のどをつるんととおつて食べやすいイカを多めになどと、魚の種類も量も、その日のイルカの体調にあわせて変えていく。

中谷がプールサイドに行くと、飼育員たちが、イルカの名前が書かれたバケツをもつてあつまりはじめていた。

飼育員のすがたを見つけたイルカたちは、とたんにいきおいよく泳ぎまわり、早く早くとさいそくするように水面から顔を出している。

朝は、おなががすいているのだ。

朝の餌やりは、イルカの体調を見るための大重要な時間でもある。

イルカは調子がいいときは飼育員がプールサイドに立つと、すぐに近くによつてくる。ぎやくに、近くにこない、餌をあげてもすぐに飲みこもうとしないときは、食欲がなく、どこか具合が悪いということだ。

飼育員は、イルカの動きを注意ぶかく見ていく。

目つきはどうか。呼吸のしかたはどうか。泳ぎかたに、いつもとちがうところはないか。

ただ、イルカはあたまがいいので、ときどき飼育員をからかうことがある。

飼育員のそばにこず、餌もあまり食べなくて心配させるのに、餌の時間がおわるとほかのイルカと元気に泳いでいるのだ。

食べない理由はわからない。からかっているのかどうかもわからないけれど、元気に泳げるのなら、すぐに検査をするのではなく、しばらくようすを見てもよさそうだ。

動物看護師の中谷は、バケツをもつた飼育員といつしょにプールをまわり、イルカたちが餌を食べるようすを見つめている。

一人の目より、二人の目。

動物看護師の目と、飼育員の目。それぞれの知識や経験をいかしながらイルカを見れば、ちょっとした変化に気づけるようになる。

動物は、言葉で教えてくれない。

野生では、弱つたところを見せれば、すぐにほかの動物に食べられてしまうかも知れない。だから、弱つてもふだんとおなじようにふるまい、ある日、とつぜん悪くなるのだ。たとえ水族館にいてもその習性は変わらない。ほんのわずかな変化も見のがせないのである。

「中谷さん！ サミの餌やり、はじめます！」

「次、こちらもおねがいします！」

餌をあげるタイミングで、中谷に、あちこちから声がかかる。

ちよつと元気がない。サインへの反応が悪い。ほかのイルカにかまれて傷ができるとい

る。

飼育員

は、自分が担当するイルカのようすを

中谷に伝えていく。

食欲のなかつたイルカが、よく食べるようになつたと思つたら、べつのイルカがけがをする。イルカたちは、毎日、体調が変わる。昨日も、大きなオキゴンドウのティダが、あごのあたりをぶつけたばかりだ。

中谷は、ティダのすり傷をデジタルカメラで撮影する。写真に残しておけば、毎日のちがいがわかるし、今、ここにいない動物健康管理室のスタッフや飼育員たちも、いつでも見ることができる。いそぐときは、動物健康管理室の全員のスマホにはいつてメツセージアプリを使い、すぐに全員が見られるようにする。

「ティダ、だいぶなおつときましたね。」

「はい！」

中谷が笑顔でいうと、となりにいる飼育員もぱつと笑顔になる。

中谷は、ティダのけがのところにスプレーで消毒液をかけた。

イルカは、ほ乳類なので体温は三十五度後半から三十六度後半くらい。人間とおなじで、具合が悪いときは体温が高くなる。イルカの体温測定は、飼育員がおこなう。

手で水面をひらりとなでるような飼育員の動きは、プールサイドにそつて水面でおむけになりなさいというサイン。イルカは、ぱつとからだを動かして、あおむけになつてういている。飼育員は、ケースにはいつた電子体温計からのびている細いチューブを、イルカの肛門からなかに入れしていく。イルカは、体温をはかられているあいだもじつとしている。



イルカの体温は、肛門から電子体温計のチューブを入れてはかる。
訓練ができるので、イルカはおとなしくういている。

ピツ。

飼育員しきいくいんがふく笛ふえが、終了しゅうりょうの合図あいづ。イルカはすぐにあおむけでうくことをやめて、『ちやんとやつたでしょ、餌えさをちようだい。』といふかのように口くちを開けて餌えさをまつ。これができるのは、訓練くんれんのおかげだ。

訓練くんれんには、二つの種類しゅるいがある。

一つは、ジャンプや、ボールをキヤツチするなど、イルカがもつている能力のうりょくを高めたかめていく訓練くんれん。

もう一つは、血液けつえきをとつたり体温たいおんをはかつたりできるようにする、健康けんこうを管理かんりするための訓練くんれんだ。ハズバンダリー・トレーニングとよばれている。

プールサイドでできるようになるため、イルカにとつても飼育員しきいくいんにとつても、安全で楽らくく検査けんさができる。そのため美ら海水族館うちゅうみすいぞくかんのイルカたちは、からだをこの訓練くんれんをうけている。

今はちょうど、もうすぐ一歳さいになるオキゴンドウのライズに、体温測定たいおんそくていができるようになつていて、訓練くんれんしているところだ。

飼育員しきいくいんが、プールサイドに立つ。ライズは、餌えさがもらえると思ったのか、すぐに近くにきて、立ちおよぎのような姿勢しせいで飼育員みを見つめている。

いきなり、チューブを肛門こうもんに入れるのではない。まずは、あおむけにうく訓練くんれんからだ。これができるようになつたら、体温計たいおんけいのチューブの先を、からだにちょっとあててみる。あてるところを、少しずつ肛門こうもんに近づけていき、いやがらなくなつたら肛門こうもんに入れていく。ちょっとずつ作戦さくせんである。

飼育員しきいくいんがライズとむきあい、サインを出だそうとしていると、母親ははおやのももがライズをおしのけるようにプールサイドのそばにやつてきた。

(わたしの子に、へんなことしないで。)

そう伝えるかのように、飼育員しきいくいんとライズのあいだに、ぐいぐいとわりこんでくる。

べつの飼育員しきいくいんが、ももに餌えさを見せて、気をひこうとするけれど、ももはライズのそばをはなれようとしない。

飼育員しきいくいんは、むりはない。ももがライズのそばをはなれないことがわかると、今日の訓きょうくんれんはおわり。ももがいやがつてているのにやりつづけると、これまでせつかく作つくつてきていた、

ももと飼育員との信頼関係がくずれてしまふからだ。

ライズのようすをじつと見ていた中谷に、べつの飼育員から声がかかる。

「中谷さん。ミンタなんですが、ちよつと熱があるし、餌の食いつきも悪いんです。」

「血液、しらべておきましょか。」

そういつて、中谷は、すぐに準備をはじめる。

イルカの血液は、尾びれにある太い血管からとる。

注射の針をさされても、ミンタは、ういたままじつとしている。ハズバンダリー・トレーニングがしつかりできているからだ。

ただ、長い時間がかかる治療や検査は、プールサイドではできない。プールの水をぬいて泳げないようにするか、プールの外に出しておこなうしかない。

その日のイルカの治療も、時間のかかるものだつた。

プールの外でおこなつていたのだが、とちゅうから、イルカがからだを大きく左右に動かしていやがりはじめた。

けれど、まだ治療のとちゅうだ。

飼育員たちは、もう少しだからがんばつてと念じながら、からだをおさえつづけていた。

おわつたあと、海獣課の河津勲課長が、きびしい表情で動物健康管理室の室長である植田啓一獣医師のところにやつてきた。

「植田さん。今日の治療、時間が長すぎませんか。」

植田獣医師が、河津課長を見る。

「あの治療には、時間がかかる。がまんしてもらうしかない。」

「でも、今日は一時間二十分かかりましたよね。長いですよ。こんなに長ければ、イルカがいやがるのもむりはないと思います。」

イルカは水のなかで生活している。水から出しだけで、体が重く感じるはずだ。

それに、イルカには、今、おこなわれていることが自分のためだとはわからない。何人

もの飼育員にかこまれ、痛いことをされればいやがるのも当然だろう。

「河津課長の気もちはわかるけれど、治療のとちゅうでやめるわけにはいかないよ。」

「大きなイルカがあばれたら、飼育員が、けがをするかもしれないじゃないですか。」

水族館でいちばん大きなオキゴンドウは、体重が一トンにもなる。尾びれを大きくふつたら、人がはじきとばされてしまうかもしれない。

イルカに、つらい思いをさせたくない。そして、飼育員を守りたい河津課長。

どちらもイルカにとつて、いちばんいいことをしたい気もちはおなじ。でも、立場によつて考え方たはちがつてくる。

「だつたら。」

河津課長は、植田獣医師を見ていつた。

「長くかかる治療のときは、麻酔をかけてもらえませんか。ぼーっとしていれば、つらいと感じることもない。人間が手術をうけるときだつて、そうでしょう。」

たしかに、麻酔をかければ、イルカがあばれることはない。まわりにいる飼育員はもちろん、治療だつて安全におこなえる。

ただ、植田獣医師は、麻酔には反対だつた。

麻酔を使つたあとのイルカはぼんやりしているので、そのままプールにもどしたらおぼれてしまうかもしれない。しつかり目がさめるまでの約一時間、プールの水を少なめにしてようすを見ながら、すぐさせなければならぬのだ。

だけど、その場所がない。もとのプールには、ほかにもイルカたちがいる。

バンドウイルカは、一頭だけがはいれる風呂おけのようなマリンタンクに入れておける。でも、オキゴンドウは、体が大きくてマリンタンクにはいらないのだ。

そもそも、どんな薬でも、使わないでいいなら使わないほうがいい。とくに麻酔は使いつづけると、ききにくくなることがあるので判断がむずかしい。

植田獣医師は、河津課長にたずねた。

「どのくらいかかる治療には、麻酔をかけたほうがいいと思う？」

「一時間でどうでしよう。」

河津課長は、すぐに答えた。これまでの治療を見ていると、一時間をこえるとイルカがからだを大きく動かして、いやがることが多かつたからだ。

「それは、プールの水をぬいてから一時間つてこと？」

「そうです。イルカを水から出して、水のなかにもどすまでを一時間でおわらせたい。」
植田獣医師は、少し考えるようだまつてある。あたまのなかで、時間を計算している
ようだ。そして、顔をあげていった。

「わかつた。次は、それでやる。」

植田獣医師は、動物健康管理室のミーティングでスタッフにそのことを伝えた。
「次の治療は、一時間でやります。」

「どうしてですか!?」

おどろいたスタッフたちから、すかさず意見が出た。

「あと五分あれば、必要な治療がすべてできるときでも、とちゅうでやめるんですか。」「すべてのイルカを、ぜんぶおなじルールでやるのはおかしいです。」

イルカは、一頭ずつ性格がちがう。長いあいだ水の外にいても、まつたくいやがらない
イルカもいる。それに、イルカによつてからだの大きさがちがうので、薬などの量がちが
う。薬などを、からだにゆつくり入れるときにおこなう点滴にかかる時間もちがつてく
る。

スタッフは全員、もつと一頭ずつによりそつた治療ちりょうをするべきだという。

けれど、植田獣医師は、河津課長と決めたことを、もういちど伝える。

「一時間でやる。一時間たつたとき、治療をつづけるかどうかは、そのときに判断する。」

「だれがですか？」

「海獣課の飼育員。その日の治療の責任者を決めてもらい、その人がストップといつたら、ストップ。」

飼育員は、イルカにとつて親のような存在だ。一頭ずつの性格を、いちばんよく知っている。だから飼育員に、限界を判断してもらうのだ。

ただ、一時間ルールについては、植田獣医師にも河津課長にも考えていることがあつた。

『ぼくたちは、二十分でできることを、三十分かけてやつていないだらうか？』

ということだ。

何分でやるという目標をたてないと、人は、かぎりなく時間をかける。

だから、時間の目標を決めるのだ。

この治療は、どうしても四十分かかる。だつたら、どうすれば三十分でできるようになるのか。自分の技術をみがき、仲間とチームワークを作る。道具を使う順番を考え、どこになにをおいておくのか変えるだけで、何秒かちがつてくる。それがつみかさなれば、一分、二分とけずつていけるはずだ。

一時間かかっていた治療を、五十五分でおえることができれば、イルカにとつてはそのほうがいいのである。

一時間ルールは、海獣課の飼育員たちにも伝えられた。

飼育員が、安全に早くイルカをプールの外の診察台につれていくことができれば、おなじ一時間でも治療にかける時間を長くすることができる。

朝、七時三十分。晴れ。

沖縄らしい湿気をふくんだ空氣に、ほんの少し海のにおいがまざつている。

プールのわきにはすでに、イルカをつりあげるためのクレーン車と、はこぶためのトラックがとめられている。

ヘルメットをかぶつた飼育員たちが、水みずがぬかれたプールの底そこで、オキゴンドウのアーサを担架たんかにのせていた。

「そのままゆつくり、おねがいします！」

プールのなかから、大きな声おおこえがする。

長くのばされたクレーンが、アーサののつた担架たんかをゆつくりとつりあげていく。飼育員ながたちが、アーサを心配しんぱいそうに見あげている。

アーサをのせたトラックは、ゆつくりと百メートルほど走り、今日きょうのために作られた診察台さつだいにむかう。厚みあつみが四十センチメートルほどある、ふかふかのウレタンマットを地面じめんならべた、特別な診察台だ。ここに、体重たいじゆう三百キログラム以上あるアーサをのせると、ぐつとしづみこむ。動きにくくなるのだ。

アーサは、見ただけでわかるほど、左ひだりほおのあたりがはれていた。膿うみがたまっているのだ。今日はこの膿をぜんぶぬき、どんな菌きんがいるのか検査けんさをする。

診察台に横よこたわるアーサのまわりに、五人の飼育員しゃくいくんが近づいてきてそつとおさえる。

アーサはときどき、あたまの上うえにある呼吸孔こきゅうこうをひらき、ふはーっと息をする。

動物健康管理室の島本優里獣医師が、アーサの顔のかおにしゃがむ。尾びれのそばには、動物看護師の高樹沙都美がついた。

治療時間を見きわめる海獣課の責任者は、飼育員のリーダー、伊波卓。そばにいる植田獣医師も、ちらりと腕時計を見て治療の開始时刻をたしかめている。

島本獣医師が、アーサのほおのふくらんだところに注射針をさして膿をぬいていく。一本ではとりきれない。そばにいる飼育員が、さつと新しい注射器をわたす。

尾びれのそばにいる高樹は、太い血管から血液をぬいている。イルカは、いやがるときは尾びれを動かす。針がささつていてるときに動くと、針がおれてしまうこともある。高樹が安全にできるように、二人の飼育員が、左右からがつちりと尾びれをおさえていた。三月とはいえ、沖縄はもう日差しが強い。どんどん気温が上がっていく。べつの飼育員がアーサのからだに、ホースで冷たい水をかけている。

「五本目です。」

飼育員が、島本獣医師に注射器をわたしながら、まわりにもわかるよう声をかける。太い注射器を四本使つても、膿はまだとりきれない。

はれる原因は、わからない。ほおのあたりが悪いのか、それとも口のなかなのか。
植田獣医師が、そばにいた飼育員の伊波に声をかける。

「口のなかが原因かも知れないから、いちど、歯の検査をしたいな。」

X線検査をするなら、アーサが動かないようにじつとさせなければならない。だとしたら、麻酔をかけるしかない。植田獣医師が考えていると、伊波が、ちょっと自慢げな顔でいう。

「アーサの歯なら、きわれます。」

「ほんと?」

「はい。口を開けたまま、歯をさわらせる訓練はできますよ。奥歯もさわれるので、ぐらぐらしているかどうかわかりますよ。」

歯がさわれるなら、原因がしぼれる。X線検査をするときも、短い時間ですむ。アーサの負担は少なくなるはずだ。

「いいね。だつたらX線検査より先に、歯をたしかめさせて。」

たのんだぞという表情で伊波を見てうなずいたあと、植田獣医師は、ふたたびアーサの

ようすを見る。からだをときどき動かして、むずかりはじめたかんじもする。

ふはーつ。アーサの呼吸がくりかえされる。

時計を見ると、アーサを水から出して四十分がたとうとしていた。

「尾びれ、注意してな。」

植田獣医師が、尾びれのそばにいる高樹と飼育員たちに声をかける。血液をとりおわり、今は点滴をしているところだ。飼育員が、尾びれをおさえる手に力をこめる。なんとか、このままアーサにがんばってほしい。

「七本目です。」

島本獣医師が注射器でとつた膿が、七本目になろうとしていた。

伊波は腕時計を見たあと、プールのほうから小走りにやつてきた飼育員に声をかけた。

「水位は？ もう、アーサが泳げるくらいまで水がはいった？」

「はい！」

飼育員がこたえる。今日は、麻酔をしていない。治療がおわつたら、すぐに水のなかにもどすのだ。もどすときに、担架からアーサをはずさなくてはいけないので、飼育員が歩

けるくらい、そして、アーサが泳げるぎりぎりの水位まで水を入れておく。

「あと七分！」

腕時計を見た植田獣医師が、全員に声をかける。

「膿、ぬきおわりました！」

島本獣医師の声がした。点滴もおわっている。

「OK。じゃあ、もどそう！」

アーサはすぐに、トラックではこぼれブールにもどされた。

このあと動物健康管理室のスタッフは、膿と血液の検査にとりかかる。

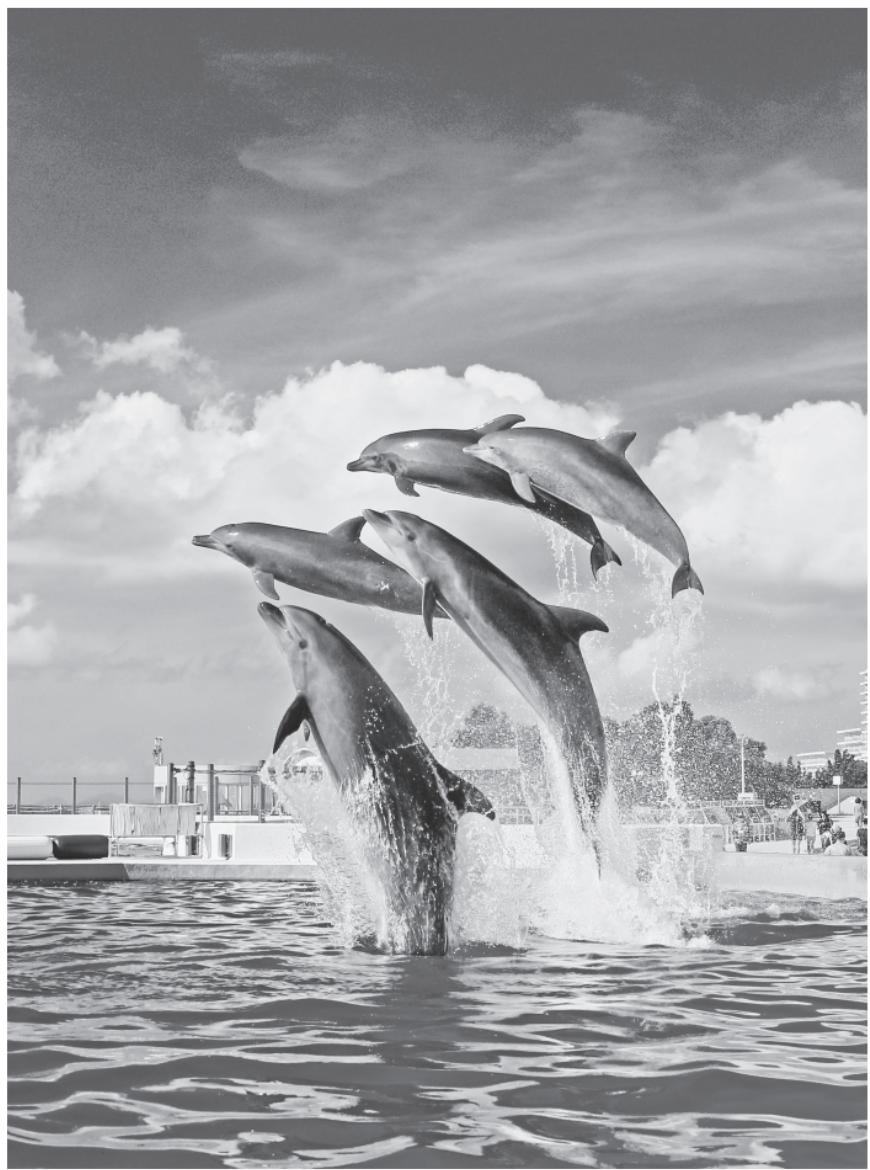
一時間ルール。

このやりかたが、イルカのために、ほんとうにいいのかどうかは、まだわからない。
けれど、よりよい治療をするためには、今のやりかたをくりかえすだけではなく、少し

でもいい方法を考え、挑戦していかなければ成長はない。

世界の水族館では、もつと進んだ治療をおこなつてているところもある。

いつか、追いつき、追いこしたい。
日本だけではなく、世界の水族館の目標となる治療すること。それが、美ら海水族館の
めざす、動物健康管理室である。



だい
第 3 章
じん こう お

サミの人工尾びれ プロジェクト

もういちど仲間と泳ぐために



二〇二〇年九月。

「サミが、しづんだ！」

イルカたちのいるプールに、大きな声がひびいた。

「水をぬけ！
全開！」

プールサイドで、飼育員が何人も走りまわっている。

ミナミバンドウイルカのサミがけがをした。尾びれあたりからの出血がひどい。助けだされたサミに、緊急手術がおこなわれた。

サミは、一九九九年に、美ら海水族館で生まれた。

イルカショードをおこなうオキちゃん劇場の名前のもととなつた、オキの子ども。性格はやんちゃで、まわりのイルカたちにちよつかいを出す、気の強いメスのイルカである。

手術をおえたサミは、一頭だけがはいれる小さなマリンタンクにうつされた。

すぐに手術したおかげで、けがはなおつた。ただ、傷から細菌がはいり感染症にかかつてしまふ。尾びれの先から、白くくさつてきたのだ。

植田獸医師は、そのようすを見てつぶやいた。

「壊死してきたか。」

尾びれが白くなつてくさる壊死は、これまでにもあつた。

二十年近く前、バンドウイルカのフジが、原因不明の感染症にかかつたときだ。

尾びれの先から白くなり、とけるようにくさつていく。電気メスで尾びれの四分の三を切りとるしかなかつた。

サミの尾びれも、毎日、どんどん白くなつっていく。

電気メスで切りおとし、残つたのは五分の一。フジのときよりも、小さな尾びれしか残せなかつた。しかも、サミの状態はもつとひどかつた。

けがをしたときに、骨がおれたうえに筋肉も切れたのだ。けがの治療がすべておわったとき、サミの小さな尾びれは、つけねからねじまがつていた。

「サミ、今日からプールにもどれましたね。ようす、どうですか？」

動物看護師の高樹が、サミのいるプールを見つめている飼育員の伊波に近づいてきて声

をかける。

伊波は、サミから目をはなして高樹のほうをむいた。

「やつぱり、うまく泳ぐことができないんですよ。」

高樹は、伊波のとなりにきてサミを見つめる。

マリンタンクからプールにもどされたサミは、ういたままじつとしている。

「ほかのイルカを入れたら、いつしょに泳ごうとするかもしれないと思つて。」

伊波は、サミを見ながらつぶやくようによ。

イルカはよく、追いかけっこをする。二頭が、よりそろのように泳ぐこともある。

「いつしょに泳ぐうちに、うまく泳げるようになるかも知れないとおもつてね。」

高樹の言葉に勇気づけられたように、伊波がうなずいた。

「ですよね。やつてみます。」

翌日、イルカを二頭、サミのプールに入れてみた。性格がおだやかで、これまでサミといつしょに泳いでいたイルカたちだ。

けれど、サミは泳ごうとしない。二頭も、うまく泳げないサミをほうつておいて二頭だけ。

けで泳およいでしまう。

べつのイルカなら、うまくいくかもしない。コニーを入れてみると、こんどはサミを氣づかうようにゆつくりと泳およいでいる。

コニーは、以前いぜん、尾おびれをうしなつたフジのむすめだ。母親ははおやのフジがうまく泳およげないときも、よりそろうようにゆつくり泳およいでいた。その記憶きおくが残のこつていたのかもしない。

「いいね。さすが、コニー。」

「このまま、サミもうまく泳およげるようになるといいのに。」

飼育員しきいんたちは期待きたいしたけれど、それから一ヶ月後げつご、コニーは突然とつぜん、朝あさからジャンプをくりかえしはじめた。

「伊波いはさん、コニーがおかしい！」

「朝あさからはずつと、ジャンプしてます！」

夕方ゆうがたになつたけれど、コニーのジャンプはとまらない。餌えさを見みせても、ほとんど食べない。泳およげないサミといつしょにいるのが、いやになつたのだろうか。

コニーもサミのいるプールから出だされる。サミは一頭とうですごすことになつた。